郷土博通信

No.16

2020 秋

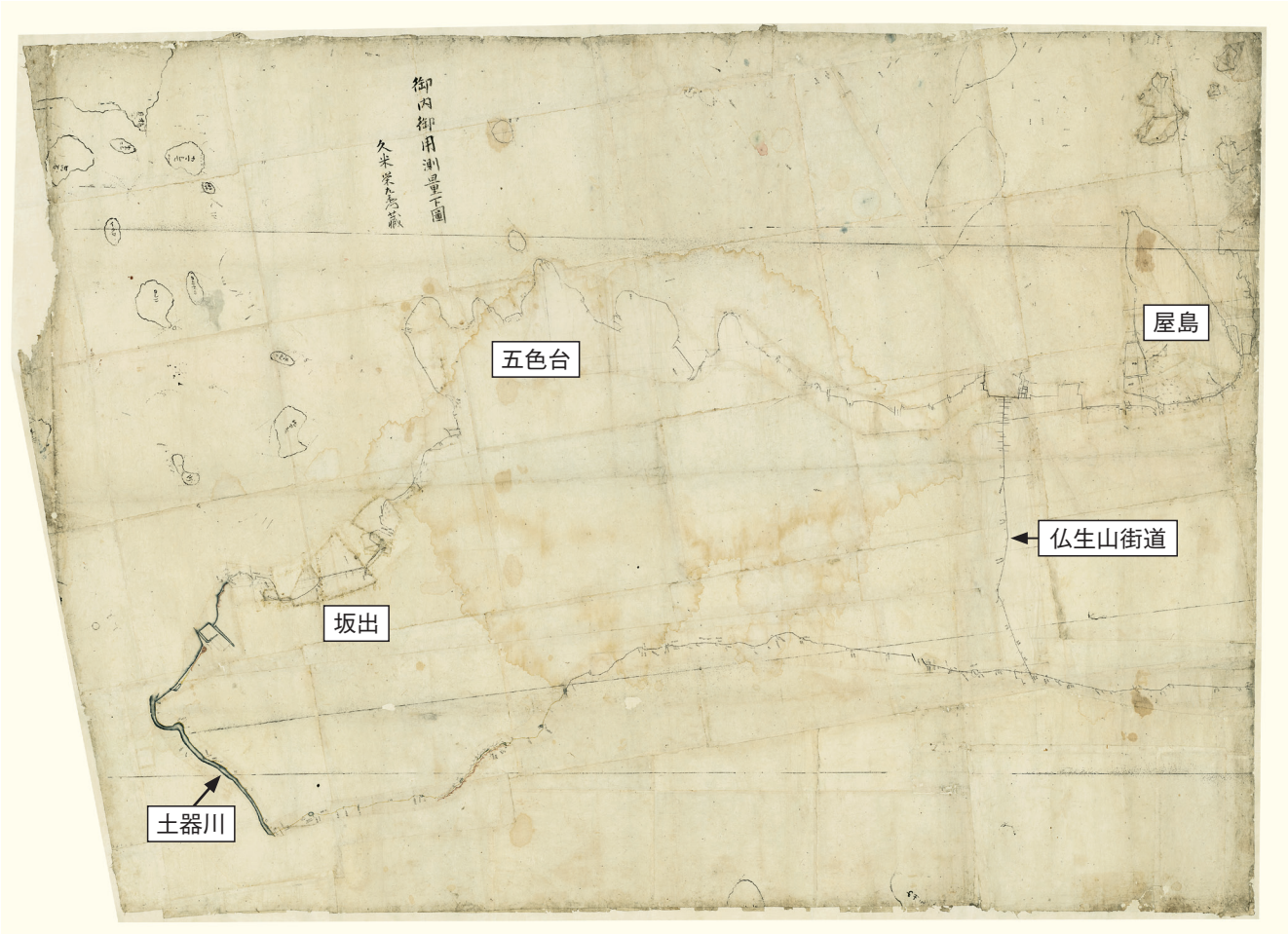
「デルビル磁石式甲号卓上電話機」（解説16頁）

CONTENTS

■「デルビル磁石式甲号卓上電話機」 1
■特集：御内御用測量下図を探る 2〜11
■特別寄稿「地図との出会い」 12〜15
■表紙解説・INFORMATION 16

公益財団法人 鎌田共済会郷土博物館

特集：御内御用測量下図を探る



御内御用測量下図（西）　185.0（天地）×257.5（左右）cm

1．はじめに

「御内御用測量下図（おんうちごようそくりょうしたず）」（以下「下図」という。）は、高松藩の命令により1800年代前半頃に、久米通賢が藩内（東かがわ市～丸亀市土器川）を測量し作成した地図の下書きと考えられているものです。

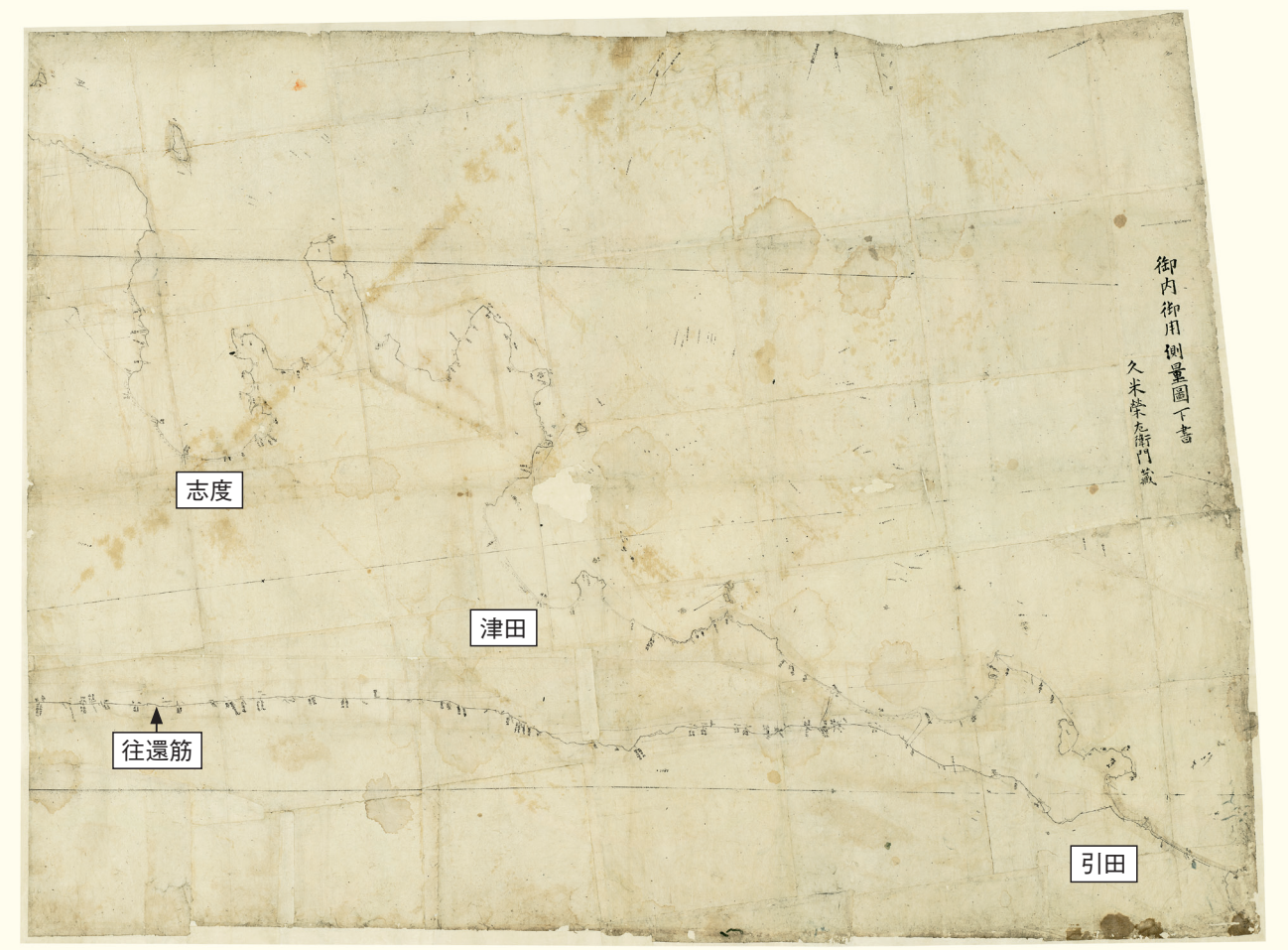
海岸線などは、現代の地図と比較しても遜色のない精度で描かれており、地図の歴史はもとより香川県の歴史を研究する上でも貴重なものです。

2014（平成26）年３月には、他の通賢関係資料とともに国の重要文化財に指定されました。2019（令和元）年度に折り目部分等の修理がなされ、適正な保存措置が講ぜられました。

しかしながら、活用については難しい点があります。この下図は大きく、かつ薄い和紙を何枚も貼り合わせて作られているため、展示は容易ではありません。そのため実物大のレプリカを作成することになり、このたび完成しましたので第３展示室で企画展を開催し、公開することにいたしました。

レプリカを利用して、下図を詳細に観察する機会が得られた結果、驚きや疑問が次々と現れてきています。

このため、本誌においても特集を企画し観察結果の一端をご紹介することにいたしました。



御内御用側量下書（東）　187.0（天地）×249.5（左右）cm

2．御内御用測量下図の概要

下図は東図と西図に分けられ、それぞれ畳３帖分もある大きなものです。約34×39㎝の紙を東西合わせて100枚近く貼り合わせており、縮尺は約1／12,000です。海岸線の輪郭、塩浜の所在を示す記号、往還筋（引田～丸亀間の街道）、仏生山街道に加え島々が描かれ、小さな字で地名などが書き込まれています。

この図の制作は測量が終わった1807（文化４）年以降と考えられ、その後加筆・修正されたようです。特に坂出地域においては、1826（文政９）年以降の塩田事業に際して再測量し、坂出・御供所浦境の舟入（運河）を描き直したことなどが確認でき、再利用した痕跡が明瞭にうかがえます。このように、この下図にはさまざまな情報が混在しています。その中から情報を抽出し再整理していくことが、今後の課題の一つとなります。

また東図は「下書」、西図は「下図」と異なる名称が書き込まれており、統一されていないことから、後に誰かが追記した可能性が考えられますが、時期等は特定できていません。

3．測量・製図　Q&A

Q.地図はどうやってつくるの？

A.大きく２つの作業に分かれます。最初に海岸線や街道の現地測量を行い、距離や方位角を記録していきます。次に測量データをもとに、図化作業を行います。

Q.もっと詳しく教えて！

A.では、通賢さんが測量してから地図を作るまでの様子を、残されている資料からたどってみましょう。

まず現地で測量をして、その数値を野帳に記録（図１）すると同時に、現場の細かな地形などを絵図帳にスケッチしておきます（図２）。測量数値は当日、もしくは近日中にいちど清書します（図３）。現場で書き込むとどうしても字が雑になりがちであることや、記録を追記したり行間にメモを書き加えたりすることもあるため、後で読み間違いが生じることを防ぐためです。測量が終わると、測量記録を整理します。野帳では日付ごとにつけていた記録を、郡や村・浦ごとにまとめ直し（図４）、それをさらに清書します（図５）。

Q.それからどうなるの？

A.測量記録が揃うと、いよいよ図化作業に入ります。まずは約1/3,000の大縮尺で、小範囲ごとに部分図（図６）を描き、それをもとに縮尺した下図（約1/12,000の小縮尺）を作成します。下図は墨一色で描かれた白地図のようですが、下図の西の端の一部分（図７）に色がつけられていることから、完成図は彩色されていたと考えられています。

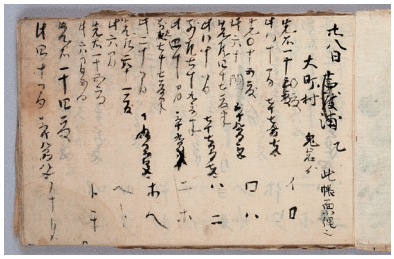


図1　『御内御用側量方位記 乙』

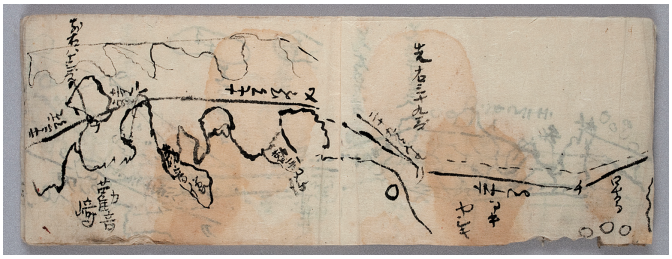


図2　『側量絵図帳』（竹居観音岬付近）

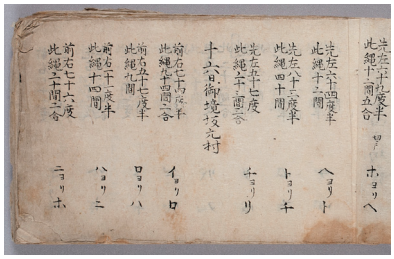


図3　『側量方位記』

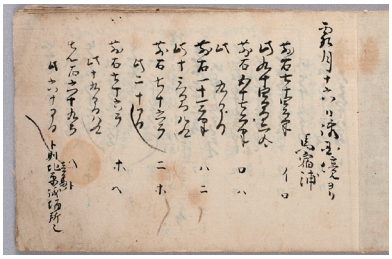


図4　『御内御用側量方位記 大内郡分』

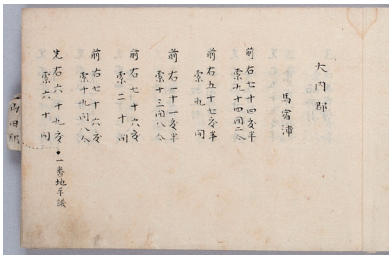


図5　『行測量海辺之方位記』

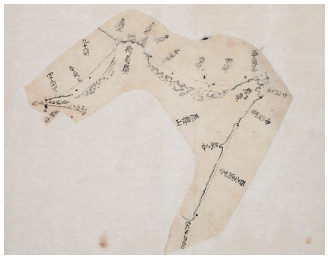


図6　〔御内御用測量部分下図〕（辰ヶ鼻・袴着鼻）（鹿浦越岬付近）

図7　下図の彩色部分（土器川付近）

Q.現地測量って、どうやるの？

A.基準となるＡ点と目標地点Ｂ点にそれぞれ仮標（梵天）（図８）を立てます。そして１間（約1.8m）ごとに目盛がついた、間縄（水縄）（図９）という距離を測定する器具で、ＡＢ間の距離を測ります。またＡ点に測量機を据え、北とＢ点の間の角度（方位角）を測定します。測量機は、お椀状の深皿の中に方位磁針を備えたものを、１m程の杖の先に取り付けた「小方儀」（図10）という道具を使ったと考えられています。距離と方位角を野帳に記録したらＡ点での作業は終了し、次の目標点（Ｃ点）に仮標（梵天）を移動して、Ｂ点から同様の作業を繰り返していきます。この測量法を「導線法」といいます。

また複数の観測地点から、共通の目標点となる山の頂上などの方角を測定します。導線法による測量が正確に行われていれば目標点で交わるはずですが、実際にはどうしても誤差が発生します。製図の際に目標点で交わるようにすることで、その誤差を解消させます。これは「交会法」と呼ばれる測量法で、通賢は自ら考案した「地平儀」（図11）を使いました。この地平儀は小方儀より精度が高いため、より正確な地図を作成しようとする通賢の姿勢がうかがわれます。

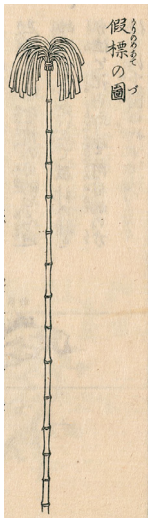


図8　仮標（梵天）

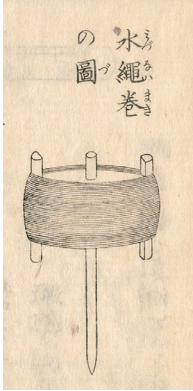


図9　間縄（水縄）

図10　小方儀

図11　地平儀

※図8～10　『算法地方大成』国立国会図書館デジタルコレクションより転載

Q.測量には何日かかったの？

A.海岸線と往還筋を測量した時は37日間かかりました。1806（文化３）年11月14日に通念島（東かがわ市）を現地測量した後、16日に「国境」（徳島県との境）から西へ向かって沿岸測量をスタートさせます。12月14日に丸亀藩との境にあたる土器川に達し、南下して「二タ村」（飯山町東二）から往還筋を東に向かって進み、12月20日に国境の「逢坂」（大坂峠）に到着して、総数1866ヶ所での測量を終えました。

Q.通賢さんひとりで測量したの？

A.測量をするには仮標（梵天）を持つ人が２人、距離を測る人が２人、方位角を測る人が１人、記録係が１人などの人員が必要です。この御用測量の場合は、渡部専助、堀井十五郎、神崎文太、木内仙三郎、阿野直記と通賢の６人に加え、加藤太、七蔵の２人の船乗りでチームを組んでいたようです。荷物を運んだり、作業を交代するためかもしれませんね。

また測量記録からは数種類の筆跡が確認できるので、何人かで協力して作業を進めていた様子がうかがえます。

Q.どうやって製図するの？具体的に教えて！

A.分度器とものさしを使います。スタート地点に針を刺し、「方位記」に記録している方位角を分度器で定め、あらかじめ決めておいた縮尺での距離をものさしで引きます。これを繰り返して製図していきます。そのため海岸線や街道のラインをよく見ると、観測点を示す針穴が点々と続いているのが分かります（図12）。

このようにして小範囲ごとに描いた部分図をつなげていきます。下図には東西南北や地平議からの観測線を示すヘラ痕が無数にあり（図13）、これらを目印として部分図の位置の誤差を修正しながら、全体をつくっていくのです。

図12　針穴（赤点部分）

図13　ヘラ痕（赤線部分）

Q.地図なのに方位記号が無いのはどうして？

A.下図であるため、未完成だからかもしれません。しかし東西南北の方位は地図作りには必要なものです。東図の右下端には東西を明示するヘラ痕があり、これを基準にして製図していったのではないかと考えられます。

4. 島の描画　Q&A

Q.島も、丁寧に描かれているのね。

A.そうです。坂出の与島のすぐ南にある三つ子島は小さくても「三子」として黒丸で表示されています。ところが描かれてない島があるんです。

Q.どこなの？

A.瀬戸大橋が架かる羽佐（わさ）島です。坂出市の与島と岩黒島との間にある小さな無人島です。

Q.どうしてないの？

A.確かな理由は不明ですが、当時の測量法と高松藩の領域が関係していると推定されます。

Q.詳しく教えて！

A.測量法から説明すると、島を地図に描くためには、最初に海のどの位置に島があるかを確定することが必要です。まず四国本土側で島が望める場所に地平儀を据えて、例えば島の岬の先端を目標点にすると、そこが北から〇度西の方角にあるかを読み取ります。次に数km離れた別の場所から同じ先端を地平儀で覗き、角度を測ります。こうして最低限２ヶ所の角度を調べます。測量精度を上げるためには、より多くの場所から測定する方が効果的です。

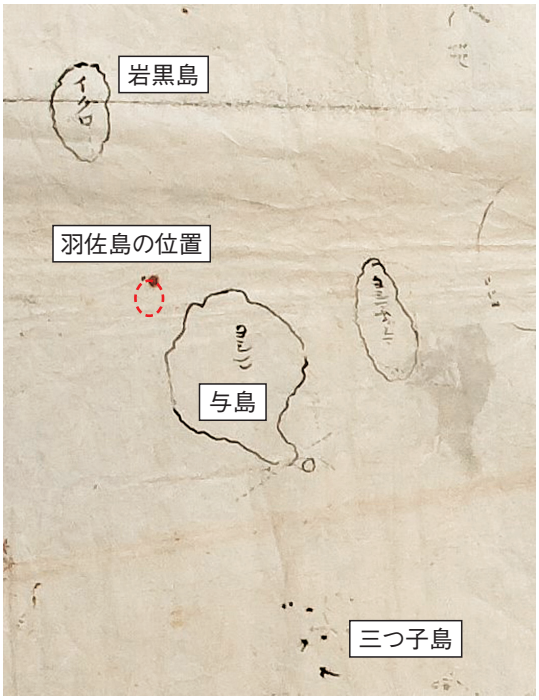


図14　下図の与島付近

Q.２つの方角から、島の位置がどうしてわかるの？

A.これは作図する際に重要なデータとなります。手順としては、すでに出来上がっている四国本土側の地図を広げ、地平儀を据えた位置に針を立て、そこから北〇度西の方向にヘラで長い線を引きます。同じ作業をもう１点で繰り返すと、２本の線が１ヶ所で交わります。その交点こそが島の岬の先端の位置になるわけです。
これらの作業を島の主要箇所で繰り返すと、島の大雑把な輪郭を描くことができます。

Q.測量方法はわかったけど、それと羽佐島がないことと、どう関係するの？

A.羽佐島は与島の北側に位置し、四国本土側からは与島や小与島の陰となって見えにくい位置にあることから角度が測れず、島の位置が確定できなかったのだろうと推測しています。

Q.坂出から見えないのであれば、与島に渡って測量すればいいじゃない！

A.そのとおりですが、ここで藩の領域の問題が関係してきます。支配領域の地図は重要な機密資料です。与島や羽佐島は高松藩領ではなく徳川幕府領だったので、他の支配下の島々に立ち入ることや、島の状況を図に描くことは憚られたのでしょう。この頃の日本は外国船の渡来などによって海岸警備などが厳しくなりつつある時期だったことも背景にあったと思われます。

Q.羽佐島のことはわかったけど、与島は幕府領なのに描かれているよ。なぜ？

A.確かに描かれてはいますが、詳細な図にはなっていません。現代の地図と見比べてみると北側の湾などは描かれていないことがわかります。さらに高松藩領の島（例えば庵治大島など）と比較すると、精度の違いは明らかです。

島に渡って現地測量（導線法―５頁参照）を行っていないためでしょう。女木島・男木島も大雑把な輪郭だけですね。この２島も高松藩領でないためと思われます。

Q.どの島に渡って測量したかわかっているの？

A.通賢が島嶼部の海岸線を測量した史料（「行測量嶋々之方位記」）が残っています。19の島に渡り、215地点で実測したデータが記されています。

高松藩領で最も大きな島は（庵治）大島で、現代とは異なっている所があります。

Q.どこが異なっているの？

A.島の南西端です。下図では岬の形状ですが（図15）、現代では周囲が侵食されて島になりつつあります（図16）。また島中央部西側は外郭形が薄く不明瞭に描かれています。大島はもともとは２つの島で、中央部の砂地が発達して陸続きに至った、いわゆる陸繋島（りくけいとう）です。200年前には西側は完全に陸化していない様子を伝えているのでしょうか。

東かがわ市の丸亀島・女島も同様に砂洲が伸びている様子が描かれています。

他の島についても詳細に観察すると、色々なことがわかってくる可能性があり、これからの研究に期待が持たれます。

図15　下図の（庵治）大島

図16　現代の（庵治）大島
（国土地理院1/25,000地形図を転載）

5．3種類の塩浜　Q&A

Q.沿岸部で注目できる点はあるの？

A.海岸に小さな記号がたくさん見えます。よく観察すると３種類の記号を書き分けていることがわかります。

Q.それは、なんの記号なの？

A.どうも塩づくりの場所を表しているようです。岩場にはなくて砂浜部分だけに書かれています。1755（宝暦５）年に築造された屋島の亥浜（いの）（現在の屋島西小学校付近）などにも書き込まれているので、塩浜を表わすものとみて間違いないでしょう（図17）。

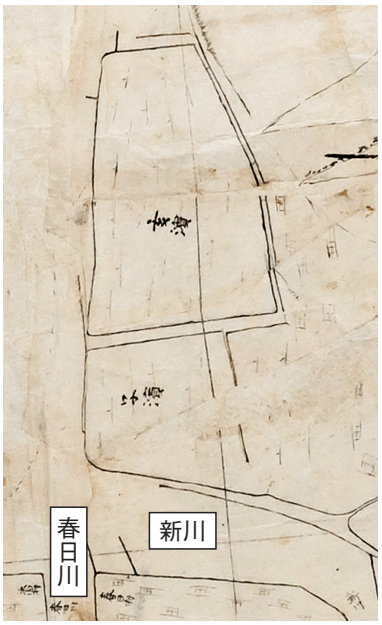


図17　下図の屋島亥浜

Q.たくさんあるの？

A.全部で77ヶ所あります。東かがわ市引田から宇多津（土器川）までの高松藩領内の数で、現在の市域別では、東かがわ市14ヶ所、さぬき市20ヶ所、高松市35ヶ所、坂出市８ヶ所になります。

Q.そんなに多く。高松市が多いんだね。

A.屋島南部の相引川沿いや庵治半島に多くあります。不思議なのは高松城下（現在の福岡町から香西西町の間）には全く書かれていないことです。
現在の高松市飯田町辺りには塩浜があったことは1642（寛永19）年の記録からわかっていますが、それらしいものは何も描かれていません。

Q.どうしてなの？

A.城下の様子は、防衛上秘密にされていたせいでしょうか。

Q.ところで、塩浜を表す記号が３種類あるって、どういうこと？

A.色々調べてみると塩浜構造の違いを表しているらしいことがわかってきました。
一番多いのは（図18）という記号（以下、A型という）で60ヶ所（全体の78%）あります。自然の海浜をほぼそのまま利用した塩浜を表わしているようです。

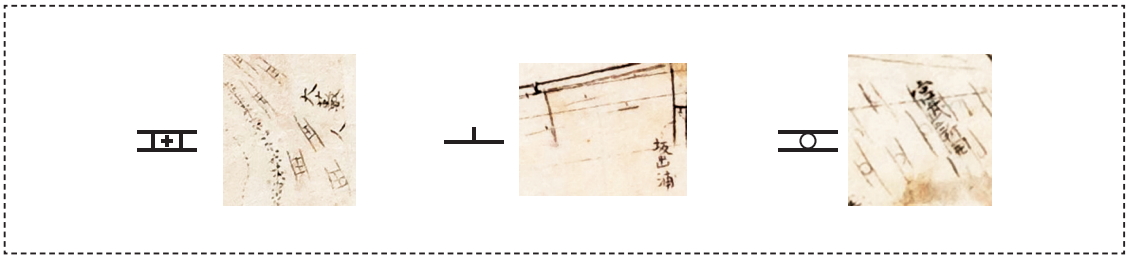


図18　塩浜を表す3種類の記号

現在の高松市庵治町浜付近の江戸時代後期の様子を描いた絵図（図19）が残されており、浜の地形や塩浜の構造を知るうえで大いに参考になります。左が北で下が海、その上の畑に挟まれて左右に伸びる筋が道です。その上の大きな丸い地割に注目して下さい。「塩濱」と４ヶ所記載されていることから、そこが塩づくりの場所だったことがわかります。

この地割を地形的に分析すると、道のある所は海岸線に沿って延びる細長い帯状の浜堤で、その上側の丸い大きな地割は凹地とみてよいものです。

その凹地は数百年・数千年前には潟湖（せきこ）（ラグーン）だったところで、そこが徐々に埋没し江戸時代には浅い凹地となり、満潮時には川を通してそこに海水が入り込み、砂に塩分が付着するという自然な仕組みの塩浜だったのです。

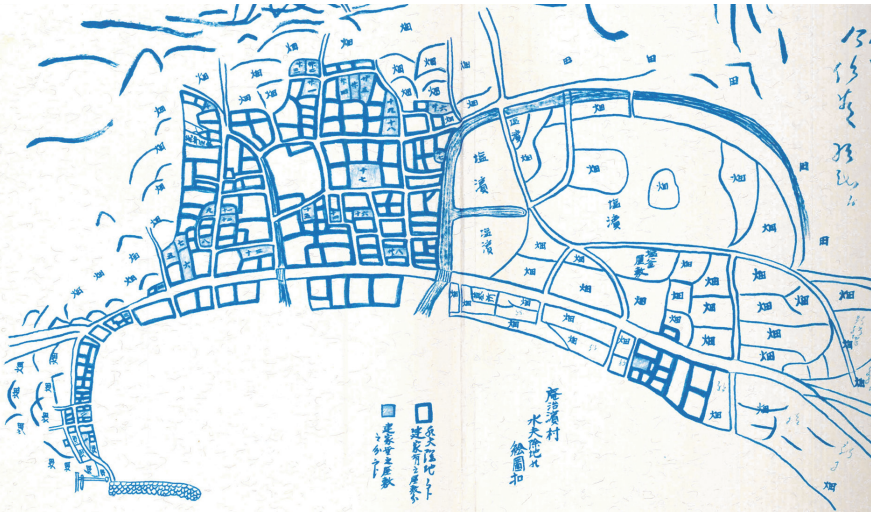


図19　庵治浜村水夫除地絵図『庵治町史』（1974年）より転載

Q.二つ目の塩田はどんなものなの？

A. ⊥（図18）という記号（以下、Ｂ型という）が書かれており、13ヶ所（17%）あります。

最初に紹介した屋島亥浜の他、高松市の生島塩田、坂出市木沢塩田などに書かれており、地図に描かれた形から人工的に築かれた所だったとわかります。

坂出市では久米通賢が造った坂出塩田の南側一帯にもこの記号がかかれています。

この地域は17世紀には「古浜」「岡浜」等と呼ばれる塩浜だったことが当時の記録から知られています。そこの旧地形の復元研究からは当初はＡ型だったと推定されますが、その後、波打ち際には石垣が築かれ（図20）、海水の導水路等も設けられた「入浜式塩田」に改良されたと推定されます。

図20　坂出市本町の江戸時代の石垣
（香川県埋蔵文化財センター写真提供）

Q. ３番目の記号はどんなものなの。

A. （図18）という記号（以下Ｃ型という）で、７ヶ所（９％）と少なく、Ａ型やＢ型のように地形や歴史からみても特徴が見出せません。

坂出市御供所町の宮武新開は1787（天明７）年完成ですが、さぬき市津田の曽根周辺や引田の安戸池西側などは全く分かりません。

図21　津田町曽根の海浜水路

そこで、現地に何か残されていないかと曽根に行ったところ、浜の風景を見て感激しました。海浜の防潮堤の下を潜って波打ち際から住宅地まで水路が幾本も伸びており、このような光景は県内の海浜部で今まで見たこともないものでした（図21）。

この水路は、現在では住宅地の排水路となっているようですが、想像をたくましくすると、元は塩田に海水を導入する役割だったと思われます。

そうすると、Ｃ型は数十ｍごとに設けられた水路によって区画された塩田を表わしていると推測されるのです。

Q. 小さな記号から、塩浜の歴史がわかるんですね。すごい！

A. 土地の特性に応じて、また改良が加えられて、塩浜は発展してきたことがわかります。

この歴史の延長線上に久米通賢の坂出塩田が、さらなる工夫を加えて登場したということを、この「下図」は無言のうちに我々に語りかけているように思えます。

残された多くの疑問

下図を見直すたびに、次々と疑問がわき出てきます。思いつくままに書き記しておきます。

・どうして山間部の国境は測量しなかったのか。

・下図には往還筋と仏生山街道しか描かれていない。なぜ他の街道は測量しなかったのか。

・測量記録の清書は４冊にまとめられ、タイトルも「行測量・・・」と統一されている。しかし、下図に描かれている仏生山街道の測量記録がこのまとめに含まれていないのは、どうしてなのか。

・下図は、なぜこの大きさ（縮尺は1/12,000）に作ったのか。

・小さく書かれた地名の上に、大きく同じ地名が書かれている箇所が多い。なぜだろう。

・東図と西図を貫く墨線が４本あるが、ふたつの図を合わせても墨線がつながらないのはどうしてなのか。

・八栗山と屋島に断面図のようなものが描かれているが、何を示したかったのだろうか。

・島名表記について、高松藩外の島では坂出の島にはあるが女木島、男木島にはないのはなぜか。

・引田町城山の沖合の島の名称は、下図では「猿子」と書かれているが、現在の島名は女郎島。いつ変わったのだろうか、それとも間違いか。

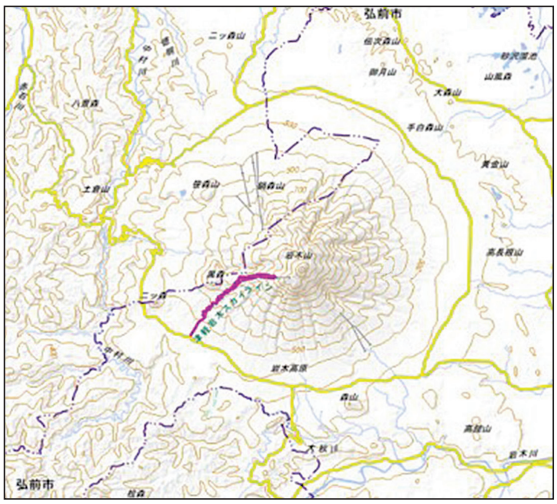
特別寄稿

「地図との出会い」

国土地理院四国地方測量部長　小枝　登

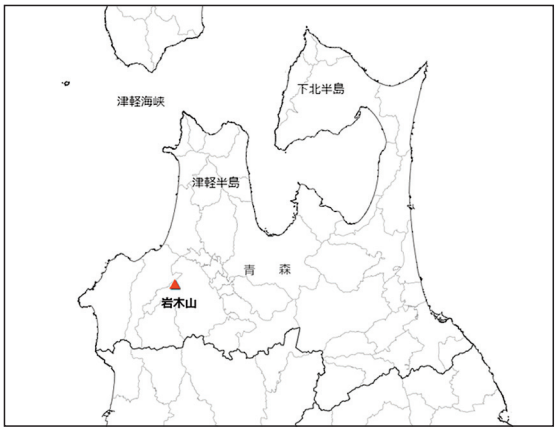
私が初めて見た地図は、小学校４年生になった新学期に配布された帝国書院の地図帳だったと記憶しております。その地図帳を帰宅するなり、照明も付けずに夕飯まで何かに取り付かれていたように見入っていたのですから、親にも驚かれました。なにせ、机に向かって勉強することが苦手で、放課後は近所の悪友と草野球に日々没頭しておりましたから、教科書類を家で開くということはほとんどありませんでした。

本州最北の城下町の田畑が広がる地域で生まれ育ち、青森県が日本列島のどこに位置するのか、この地図帳を手にするまでは知らなかったのです。ページを開くと世界の国々が色分けされた世界地図や日本全図、地方毎の図、主要都市の拡大図など見てただただ驚き、感動していたと記憶しております。



図−1　岩木山（地理院地図より）

人は何かに感動した瞬間から、時の流れを忘れたかのように、見入ったり聞き入ったりすることがあると思います。そんな経験をしたことはありませんか。



図−2　青森県（本州最北端）

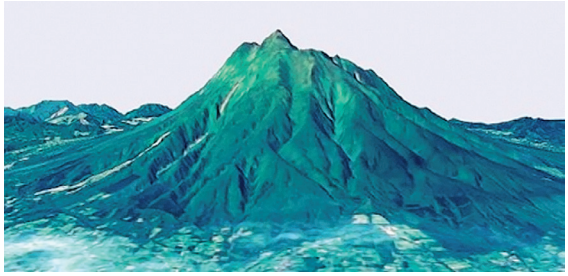
その後、社会の授業で、日本におけるふるさとの位置について、地図帳をめくり青森県の形や自分たちが住んでいる津軽平野の位置などを見つけることを行っていたと記憶しています。眺めていた図に、曲線がバームクーヘンの輪ごとくに描かれ、その中心に「岩木山」という文字が印刷されているのを見つけ、これが何なのかを質問した記憶があります。まだ、地図を見て高い所と低い所の区別や地図にある記号は何を表しているのか、縮尺？とは何にするものという知識レベルですから、

先生の答えもほとんど理解できなかったと思います。しかし、理解はできずとも何かを発見することはできます。よく見ると、岩木山を表す曲線の他に、自分が住んでいる近くを通る黒く太い曲線があることに気がつき、この線は何を表すのかを質問し、道路であることを理解しました。そのとき、先生から、山は見る場所で形が変わるという説明を受けたことが、地図との関わり合いの起点となったと思います。地図をいくら眺めても山の形が変わることは理解できず、どうしたら、形の変わった岩木山を見ることができるかを考えてみましたが、答えは見つかりませんでした。

やがて５年生の春に、親戚から中古の自転車をもらいうけたことから、自転車でなら自分一人で山の形が場所で変化することを確認できる、岩木山を一周すればいいと思いつきました。我ながらいいアイデアが出たものと思い出しますが、冷静に考えれば無茶な考えです。しかし、好奇心とは恐ろしいもので、岩木山を一周する距離を調べるために、足は入学以来入ったことの無い図書室に向かわせました。

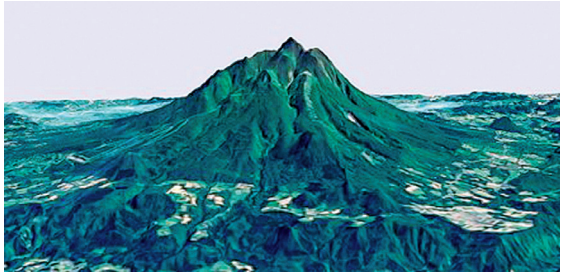
数日図書室に通い本から距離を調べようとしましたが結果は惨敗でした。諦め切れず、先生に相談したところ、理由も聞かずに自宅から数種類の地図を持ってきていただき、１週間程図書室で距離を調べるのに付き合ってくれました。そのおかげで１周の距離は45km程度であることがわかり、道路が曲がりくねって書いてあるところは、坂道で勾配があることなど地図の見方や道路標識の見方を教わりました。そして、この年は、道路標識の見方とパンク修理を覚えながら、体力をつけることに専念しました。

図−3　実家近傍からの岩木山



図−4A　岩木山3D（East）

図−4B　岩木山3D（North）



図−4C　岩木山3D（West）

※図−4 A,B,Cについて
（地理院地図　https://maps.gsi.go.jp/）
地理院地図を用い背景を「写真」として、ツールの3D表示機能を利用し、高さを2倍に作成しています。（3Dデータを DLし、3Dプリンターで模型も作成可能）
自由に回転させたり、方角を指定することができます。

国土地理院で刊行している紙地図は、一度登山等で使用経験のある方なら濡れても折っても破れづらいという感想をお持ちと思います。この地図用紙は、愛媛県四国中央市にある製紙会社で作られている和紙で、地図以外には日本紙幣にも使用されています。普段、財布の中にある紙幣と書店で１枚435円の地図（1／2.5万地形図 柾判：多色）とは、ほぼ同じ材質の紙です。紙幣と紙地図を並べた際、何となく得した気分になるのは私だけでしょうか。

２年前、地図に出会いその後に知った「山は見る場所で形が変わる」を自分の目で確認するという目的は、小学生最後の学年に実行し達成されました。

岩木山一周の旅？冒険？は、７月初旬から準備を進め、夏休み前に計画書？を担任の先生に提出し、夏休みに入った最初の土曜日に決行しました。

朝７時頃、昼食のおにぎりと水筒、パンク修理工具一式、小銭、タオルそして担任の先生からいただいた地図（道路マップを切り取ってくれたと記憶しています）をリュックサックに入れて、自宅を出発しました。計画は、自宅から岩木山周回道路の交差点まで行き、そこからは道路を右回りで走行し一周して自宅に戻るルートとし、１時間に１

回毎に休憩するとして作成しました。最初の２時間は、急な上り坂もなく休憩の度に山の形の変化を確認しながら順調にすすみましたが、それ以降は見知らぬ風景に心細くなり、また急な坂に悪戦苦闘し、休憩毎に地図で現在地を確認してはあまり進んでいないことに愕然としながら、ひたすらペダルを漕いていました。今思い返せば、途中でやめなかったのは、見る度に姿を変える山の形に驚きと感動を覚え、うれしい・楽しいといった感情が、見知らぬ道を走行する不安や待ち受ける急な坂での苦闘を上回ったからだと思います。夏の冒険は、その日の夕方４時前にパンクや転倒もなく無傷で無事にゴールできました。

50歳になった頃、高校生の息子と帰省した際に、同じルートをロードバイクで３時間かけて一周しましたが、思っていたより起伏が激しく、変速のない自転車でよく走れたものだと感じました。

今に思えば、不便を工夫して過ごした、いい時代に生まれたものと思っています。

現代では、小学生が自転車で45kmを一人旅することを学校も親も許可しないと思います。当時は、車の交通量も少なく、子供の数も多かったので、少しくらい無茶しても元気があっていいとあまりに気にされなかったものと思っています。

地図を読めるようになり、地図と関わる仕事をして来て、家族にも言えないような苦労も失敗もありましたが、地図一枚を頼りに道の無い山へ登り、見知らぬ土地を一日散策するなど自分流のルートで、人と違った楽しみ方ができるようなりました。また、小学校時代に地図帳を見て、いつか行ってみたいと思い描いた、北海道、関東、西日本、沖縄には転勤で居住し、その地域の魅力を堪能することができました。国土地理院の測量・調査作業で47都道府県のうち45都道府県に宿泊しており、のこり２県（東北１県，九州１県）に宿泊し全国制覇するのが今の目標です。とりあえず、九州地方の観光マップを読み込んで、制覇の準備をしています。

本稿は、公開講座の講師をお願いしておりました小枝登氏（国土地理院四国地方測量部長）より、ご寄稿いただいたものです。

残念ながら講座は中止となりましたが、このような貴重な体験談をお寄せいただきましたことに感謝いたします。

「デルビル磁石式甲号卓上電話機」について

（表紙解説）

表紙でご紹介している電話機は、1902（明治35）年に製造された卓上電話機です。磁石による発電機が内蔵されており、側面のハンドルを回して発電し通話する仕組みになっています。底部には呼出音を鳴らすベルがあり、本体や送受話器の取手部分には、美しい装飾が施されています。私たちがイメージする電話機とあまり変わらない形をしていますが、ダイヤルが無いことにお気づきでしょうか。

当時の電話のかけ方は、まずハンドルを回して電話交換手を呼び出し、相手の電話番号を伝えます。そのためにダイヤルが無いのです。交換手が手動でプラグを差し込み、交換機の線をつなぐことで相手につながり、ようやく通話が可能となります。現在は自動交換機であるため、直接相手と通話することができます。さらにインターネットを利用したIP電話も登場しています。

1890（明治23）年、東京～横浜間で日本初の電話サービスが開始されました。当初の加入数は197世帯で、東京府庁（現在の都庁）などの官公庁のほか、銀行、新聞社といった企業が主な加入者でしたが、大隈重信や渋沢栄一などの個人もいたようです。開局当時、東京の市内通話料金は年額40円で、東京～横浜間の市外料金は5分で15銭です。お米1升（約1.5kg）の値段が8.9銭であったことを考えるとかなり高額であり、庶民が気軽に利用できるものではありませんでした。

香川県における初の電話交換業務は1907（明治40）年2月21日に高松で始まり、丸亀・多度津・善通寺と続きました。坂出は1910（明治43）年8月16日から開始され、加入数は64世帯でした。電話番号1番は、当時貴族院議員であり、後に鎌田共済会を設立した鎌田勝太郎です(1)。

鎌田勝太郎は坂出の電話交換所開設に尽力するなど、電話の普及に強い関心を抱いていたようで、1922（大正11）年に開館した鎌田共済会図書館に電話機を設置し、電話によるレファレンスを推奨していました(2)。表紙の電話機は装飾性が強いため、図書館の事務用としてではなく、鎌田勝太郎のもとで使われていたのではないかと想像されます。

日本で電話サービスが開始されてから約130年、今や電話機は私たちの手の中に収まるようになりました。通話以外の様々な機能が集約され、日常生活に無くてはならないものとなっています。

（宮武 尚美）

参考文献
(1) 2020『坂出市史』通史下　近代篇
(2) 1925『鎌田共済会雑誌』第６号

INFORMATION

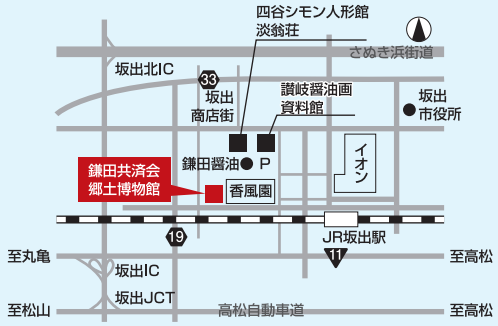
■新型コロナウイルス感染症の状況を受け、2020年度中の各種イベントの開催は中止とさせていただきます。

■展示解説のご案内

学芸員による展示解説を随時受付けています。
事前申込は不要ですので、ご希望の方は事務室までお声がけ下さい。

感染防止対策を実施しています

鎌田共済会郷土博物館



Access
高松から…快速マリンライナーで約15分
岡山から…快速マリンライナーで約40分
JR予讃線坂出駅から徒歩5分
※駐車場あり

開館時間：午前9時30分～午後4時30分（入館は4時まで）
休 館 日：月曜日／祝日
夏季特別（8月13日～15日）
年末年始（12月29日～1月4日）
入 館 料：無料

OKIELECTRIC WORKS
No.532
NOV. 1902

□発行 令和２年10月１日　□発行所 公益財団法人 鎌田共済会郷土博物館 〒762-0044 香川県坂出市本町一丁目１番24号
TEL：0877-46-2275　FAX：0877-45-0035　HP：https://www.kamahaku.jp/　e-mail：k-museum@kamahaku.jp